



Title	理学部N123 (中谷宇吉郎教授研究室) 復元展示室
Author(s)	眞崎, 睦子; MASAKI, Mutsuko
Description	北大施設探訪
Citation	リテラポプリ, 28, 15-15
Issue Date	2006-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42596
Type	article
File Information	masaki_LP28-15.pdf



理学部N123 (中谷宇吉郎教授研究室) 復元展示室

言語文化部 眞崎 睦子



「イグアノドンの背中に
ゴリラが乗ってた 乗ってた」

と口ずさみながら、北大総合博物館の「モンゴルと恐竜」展を訪ねた。私はゴリラではないので徒歩で。猛暑の札幌、と暑中見舞いに書いても信じてもらえない八月のある日のことである。建物の中はいくぶん冷やっこい。恐竜展ではイグアノドンも控えめに並んでいた。大きいくせにおとなしいという評判は本当らしい。一九四五年の冬、イグアノドンは羊蹄山麓の中谷家でも人気者だったそうである。帰り道、ハルニレの下、いつもは憎憎しい嘴太ガラスどもが鳥脚類の小イグアノドンに見えた。

そして九月、涼風立つ昼下がり、総合博物館(理学部)前で一人、構内循環バスを降りた。ご案内くださる古川先生とバスの中でおち合うはずだったのに。

古川先生は何処へ、と思っていたら、何やらまだまだお若い女性四人組が入り口前で写真を撮ろうとはしゃいでいらっしやる。「あ、シャッター押ししましょう」と声をかけてみた。みなさん札幌市内にお住まいらしい。二枚目の写真を無事撮り終えたところへ古川先生が、バスに乗り遅れられたところで低温研(北大の北の果て)から走って来られ

ただ(すこい)。

こうして古川先生を先頭に、先生を出会った四人組(日田さん、I田さん、O塚さん、日沢さん)と、後から加わった千葉からのお客様、S藤さんとI上さん、しんがりをつとめる私、計八名は一階N123、中谷先生の研究室を探索した。

中谷先生——雪の結晶の研究で知られている中谷宇吉郎の研究室が理学部一階に復元展示されていることをご存知だろうか。

昔の学び舎の匂い。鋸が並ぶ布張りの椅子、そして木製のロッカー。中にはご愛用の黒いウールのベレー帽とカーキのコート。まだご帰宅前のように。昭和十七年日眞光学精機社製のスンプ顕微鏡の前に立つ中谷先生、じゃない、古川先生が「覗いてみてくださいさい」。「あらあ、「雪印のマークみたい」と次々にあがる歓声。ベントレーの写真集が木の両袖机の上に置かれていて、「あ、これ、僕のだ、こんなところにあったのか」と古川先生。先ほどの顕微鏡も窓に掲げられた四枚の雪の結晶の写真も古川先生の手によるもの。木製のロッカーを楢おけにと希望されていたK先生をはじめ、中谷先生ファンは多い(前号の感想をお寄せくださった金沢のS田様もですよ)。実は私もその一人な



のだ。しかし、中谷宇吉郎の名を私に刻んだのは「雪は天からの手紙」という言葉でも知られる科学随筆、中でも「イグアノドンの唄」である。エッセイ中に中谷先生の小学生(当時)の息子さんが作った唄がある。冒頭の二行からこう続く。

ゴリラの背中に

お猿が乗ってた 乗ってた

お猿の背中に

鼠が乗ってた 乗ってた

鼠の背中に

蚊とんぼが乗ってた 乗ってた

蚊とんぼの頭の上を

艦載機が飛んでった 飛んでった

そしてこの「自分の国の敗戦も、自分の身体栄養低下も、実感としては何も知らなかった男の子は「仮りそめの病気がもともと、急に亡くなってしまった」とある。

「イグアノドンの唄」は雪のようにやわらかく、雪のように厳しく、胸にせまる。

見上げればナナカマドの実が消印の朱に染まっている。誓沢にも白箋の便りを踏みしめる季節はすぐそこに来ている。

(まさき むつこ)